雑記

第四回世界女性会議・九五NGOフォーラム

―部落解放同盟中央本部女性対策部参加ツアーの一員として―

中田　理恵子

はじめに

九月四日から北京で開催される政府間会議を前にして、開催されるNGO（非政府組織）フォーラムに参加するために、八月二九日～九月三日の日程で、部落解放同盟中央本部女性対策部の第四回世界女性会議・九五NGOフォーラム参加ツアーの一員として北京を訪れる機会を得た。以下、日程にそってNGOフォーラムのほんの一部分であるが、私見をまじえて紹介する。

八月二九日

午前の便で北京へ、北京空港は大変な混雑ぶり。女性会議に参加する人、その人たちを出迎える旅行社の人でごった返している。ホテルにチェクイン後、IDカード（身分証明書）を参加者一人ひとりがもらうために、NGO女性フォーラム登録センターへ向かう。全員無事にIDカードを受け取る（ただし、一人のカードのみ懐柔県までとりに行かねばならないというアクシデントがあった）。

八月三〇日

「平等・開発・平和」をテーマにNGOフォーラムの開会式が午後五時（現地時間）から北京市内のオリンピック・スポーツセンターで開催された。当初ツアー参加者の半分しか入場できないということであったが、全員

開会式に参加でき一同ホットする。

収容人員は二万四千人。NGOからは、先着順で一万五千人が参加した。

開会式では、過去三回（メキシコ・コペンハーゲン・ナイロビ）の女性会議NGOフォーラムの事務局長や今回の事務局長、政府間会議事務局長のモンゲラ(Getrude Mongella)さんからのメッセージがあったほか、歓迎のマスゲームが行われた。参加者全員が最後には、手をつないだり、腕を組んだり女性の力を一つにして、女性の地位向上を女性自身が行動を起こして勝ち取っていくのだという熱気に会場全体が包まれ、感動を覚える。

八月三一日

朝から膨大な数のワークショップが開催される。参加者（五六名）を五班に分け、反差別国際運動が開催した「女性と人身売買に関する」ワークショップに一・二班が参加し、三班・五班が政治参加のワークショップ、四班が従軍慰安婦問題のワークショップにそれぞれ参加した。しかし、私の属する三班は、ワークショップ会場が満員のため、会場に入れず他のワークショップを順に見て回り、会場の玄関前で九月一日午後三時から部落解放同盟女性対策部が開催するワークショップの呼び込みのためのパーフォーマンスを行った。

〝はっぴ〟を着て、河内音頭にのせて「母はたたかわん」を各自が口ずさみながら、盆踊りを輪になって踊った。外国からの参加者もその輪に加わって踊ってくれていた。

踊りの輪の後ろに参加メンバーが日本から持ってきた寄せ書きをした布をつなぎ通りかかった人たちにも寄せ書きを依頼した。ロシアからの参加者は、私たちが踊っている間、その寄せ書きの布を持って協力してくれた。

パーフォーマンスは、かなり効果があったようだが、言葉の壁が厚くワークショップの中身について細かくたずねられると、明日のワークショップで詳しく聞いてくれというのが精いっぱいなのが歯がゆい。

中国のある女性は、日本は単一民族なのになぜ差別があるのか、理解できないと言っていた。

九月一日

午前中、サーミー（北欧の先住民族）のワークショップに参加する。

ワークショップ主催者は、ノルウェーからの参加者だがスウェーデン・ロシアにもサーミーはいるとのこと。ロシアのサーミーはトナカイが手に入らなく、伝統がど

んどん風化しているとのこと。

サーミーの現状・歴史・環境について報告がなされる。サーミーの最も大切なものは、トナカイ（衣・食に使用）であるが、市場経済の導入により、一家族一頭（法律ができるまでは、男女が各一頭づつ所有していた）しか所有できない。

自然破壊（チェルノブイリの放射能汚染など）が進み生きにくくなっており、サーミーの人びとは、原子力発電反対の運動を呼びかけ、もちろん核実験（フランス・中国）にも反対しており、自然のバランスが破壊されたらどうなるのか考えてほしいと訴えていた。

一九七〇年代にサーミーの女性の組織化が始まり、一九八〇年代にサーミーランドで国際女性先住民会議が開催された。一九九〇年にはロシアのサーミーが組織化される。一九九四年ノルディクフォーラムを開催し、数カ国の女性が交流する。

女性が伝統文化を守る役割を果たしてきたが、政府の規制により、伝統が破壊されてきていること、地域のコミュニティーハウスの建設や障害者施設、保育所の建設・運営を行っていること、また、国際的な活動として国際先住民族協議会に参加して、先住民女性の権利獲得のためにさまざまな機関に働きかけ政治的課題に取り組んでいることなどが報告された。

午後三時、部落解放同盟中央本部女性対策部主催のワークショップ「アジア・太平洋マイノリティ・先住民族女性ワークショップ」に参加。

約二二〇名（日本以外六二名）の参加者があり盛況であった。

このワークショップは、以下の趣旨の下に開催された。

「世界の女性解放運動は一九七五年メキシコでの第一回世界女性会議から一九八五年の第三回ナイロビ会議を経て、飛躍的に発展したが、女性差別に加えて、マイノリティとして差別、抑圧を受けている各地の少数民族、先住民族や日本の被差別部落のようなマイノリティグループの女性たちが、二重三重に抱えている問題に関しては、明確な提起がされないままである。

北京女性会議のNGOフォーラムの場で、アジア・太平洋地域のマイノリティ・先住民族の女性が一堂に集まり、それぞれが抱える問題を明らかにし、支援しあう関係を作り、また共通に抱える問題について共同して解決する具体的道筋を探ることを目的としてワークショップを開催する」

最初に、西川英子さん（部落解放同盟中央女性対策部員）から「わたしの人生を変えた識字」と題して、六畳

一間に一〇人が暮らす生い立ちから識字教室に参加して、解放運動に目覚めていく様子、そして人間変革をとげた話を情熱を込めて報告された。次に日本の民謡の紹介として、中村陽子さん（部落解放同盟中央女性対策部員）が「貝殻節」「安来節」を披露し、それにあわせツアー参加者がふりをつけて、踊るというパフォーマンスも飛び出した。

二番目のスピーカーは、ベルニス・シーさん（フィリピン、先住民族コルディレラ女性組織INABUYOG代表）である。

ラモス政権は、フィリピン二〇〇〇年計画と称して、コルディレラ地域（資源が豊富に眠る地域）の開発を進めている。この地域には、一〇の大きな川があり、三つの水力発電所が建設されている。現在建設中のものも入れると一四の発電所ができる。これは、フィリピンの電力需要の五〇％をまかなえる量である。

また、この地域は金・銀・銅がとれ、鉱山開発が四ヵ所で行われている。土地を搾取され、先住民族に残された資源はわずかなものとなっている。また、アグリービジネス（農地の転換）として、バギオ市全体が観光センターとして開発されようとしている。コルディレラは、スペインの植民地として三〇〇年間、その後アメリカの植民地であった。コルディレラは、森林とみなされていたためそこに住んでいた先住民の権利をスペインもアメリカも認めなかった。

一九七〇年代開発が始まったために先住民たちの中に自分たちの土地という権利意識が生まれた。先住民の自決権を要求し、木材の伐採に対する反対運動を進めている。今後は、国連にむけた活動だけではなく、国際的な活動を進めていきたいと述べた。

三番目のスピーカーは、計良智子さん（ヤイユーカラの森）である。

「アイヌ民族文化を現代の暮らしに生かす――ヤイユーカラ（自ら行動する）の旗をかかげて――」と題して、報告があった。「長く困難な搾取と同化の歴史のなかで、女たちこそがアイヌ民族文化を暮らしのなかで守り伝えてきた。いまは私がフチ（お婆さん）たちの心を受け継ぎ、次の時代に伝えていく」という決意の下に活動を行っていること、また、『北京世界女性会議』で提案される「行動綱領草案」のなかで、以下の項目が採択され、実施されることを要望された。

戦略目標　A1…60(S)～文化の多様性が尊重された政策とプログラムの開発

戦略目標　A2…63(E)～先住民の権利についての国

際宣言の採択

戦略目標　B4…85(N)～先住民女性および女児が自らのニーズや目標、文化に対応できるような教育を受ける権利を認め支援する

戦略目標　K2…256(a)～持続的開発のための政策・計画の策定において…先住民女性を含むすべての女性の持続的資源管理に関する視点と知識を取り入れる

これらの報告を受け、会場の参加者との質疑討論に移った。

尼崎に住むという日本女性から、「部落差別があることは、悲しいことである。自分も差別したくないし、また差別されたくない。しかし、部落解放同盟の運動方針が過激すぎて受け入れられないのではないか。つまり、知人のあるマスコミ関係者（男性）が、差別につながりかねない発言をしたとして、部落解放同盟関係者に事務所に呼び出され、糾弾を受けた。このようなやり方では、理解を得られないのではないか」という主旨の発言があった。これに対して、部落解放同盟女性対策部員から「あなたは、部落差別の現実を知っているのか。部落差別発言によって命を奪われているという現実があることを知っているのか」

また、計良智子さんから「北海道でアイヌと部落差別に関わった発言があり、共同で糾弾会を行っているが、あなたは、実際に糾弾会を見たことがあり知っているのか」などの意見が出され活発な意見交換が行われたが、尼崎から来た女性は、通訳者もおり参加者の五分の四が日本人であるにも関わらず、あえて英語で発言した。日本人以外の参加者に対して、ワークショップを開催している団体が、過激な人たちであるとの印象を持たせようと意図したのではないかと考えられる。日本での今後の活動課題として、持ち帰ることになった。

また、文化交流としてニュージーランド先住民族の参加者から歌の披露があり、受付付近では、日本の参加者が他の国の参加者に折り紙を教える光景も見られた。

NGOフォーラムには、世界から三一、〇〇〇人が参加し、約五、〇〇〇のワークショップが開かれ、民間会議としては最大規模のスケジュールで行われ、人権、暴力、貧困、健康、教育などの問題で、女性たちの関心と連帯を掘り起こした。今後、政府間会議で採択された「行動綱領」にもとづいて、日本の国内行動計画づくりに、NGO側の意見をどれだけ、反映できるかである。

九月二日　自由行動、九月三日　帰国。

「二一世紀を展望した総合的ビジョン」に わたしたちの声を反映させよう！

アジアで開催された第四回世界女性会議に参加できたことは、大変幸運であった。部落女性にとって、世界女性会議のNGOフォーラムにおいて初めてワークショップを開催することができたのも画期的であった。

部落解放運動のなかでも「女性が変われば部落が変わる」という言葉がいわれて久しいが、これはそのまま「女性が変われば世界が変わる」に当てはめることができる。

一九七五年の国際婦人年から二〇年を経て、世界の女性の地位向上はどれだけ図られたのか。先進国の女性たちは、自国での地位向上をどれだけ図れたのか。そして、後進国といわれる国々の女性たちの地位向上はどれだけ進んだのか。

日常生活を振り返って見るとアジアの女性たちの安価な労賃で作った衣類・食料にどれだけ日本で生活する者は、お世話になっていることかと実感する。北京会議に身につけていったTシャツ・ズック・ナップサック・帽子など、すべて中国・台湾製の安価な物ばかりである。

第四回世界女性会議がアジアの北京で開催されたことの意義をしっかりと認識し、お祭りさわぎや行事として風化させることなく地に着いた女性の地位向上に結びつく活動を足元から進めていかねばならない。アジアに生きる女性の一人として、日本国内で何をしなければならないのか。そして、部落女性として何をなすべきなのか。課題は、山積している。女性の地位向上のための具体的な行動がますます求められている。

まず早急に取り組まなければならない課題がある。北京会議で採択された行動綱領の実施にともなって、各国政府は一九九六年中に国内行動計画の作成を求められている。

日本においても、総理府男女共同参画審議会が一九九六年夏に答申を出す予定にしており、政府の策定する「男女共同参画社会づくりのための新たな行動計画」に反映されることになっている。

総理府は、「男女共同参画審議会部会における論点整理」を公表し、地方公共団体やNGO、国民各層から意見を広く求めている（一九九六年二月二五日締め切り、後掲資料参照）。

被差別部落の女性をはじめ、さまざまな被抑圧の立場にある女性が、男女平等社会を実現するために行動計画に意見を反映できるよう積極的に提起していかなければ

ならない。

また、一般施策から排除されてきた部落女性が運動によって闘い取ってきた諸施策（保育所建設・保育料の減額、識字学級の開設、生活保護費の男女格差の是正、妊産婦対策＝現在は、就労保障の闘いによって公的保険制度に加入した人が保険制度から、分娩費を受け取ることができるようになってきているために見直しされている）を普遍化できるよう、一般の諸施策に反映できるよう被差別部落の女性の側から提言していくべきだし、このような取り組みが日本で行われていたことを世界に発信していく作業が必要である。

さらに、被差別女性のＮＧＯをはじめとしたＮＧＯのネットワークづくりが今後ますます重要である。日本国内のＮＧＯをはじめ、世界のＮＧＯとのネットワークづくりを行うことによって先進的な取り組みを学ぶことができるだろうし、それによって被差別部落の女性の取り組みも多様化し、一層の内容充実がなされるのではないだろうか。

是非、後掲資料を参照のうえ、総理府男女共同参画室にどしどし提言していこう。

〈参考資料〉

「非政府組織（ＮＧＯ）宣言（要旨）」

「北京宣言」、「第四回世界女性会議行動綱領目次」

解放教育研究所編『解放教育』三三六号、一九九六年二月号

表現と人権

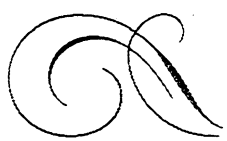
「差別表現の克服」と「表現の自由」は対立すべきものなのか

（筒井氏の「断筆宣言」後、起こった「言葉狩り」批判。「差別表現」の克服と「表現の自由」は対立するものなのか。さまざまな視点から「差別表現」について考察した書。）

部落解放研究所編

四六判、288頁

定価1,800円（税別）



表現と人権

部落解放研究所編